

2007 年度統計関連学会連合大会の報告

神戸大学大学院経済学研究科・谷崎久志

9月6日から9月9日の間、神戸大学の経済・経営学部本館にて、統計関連学会連合大会が開催されました。研究報告が行われる大会会場として100人以上収容可能な7教室、受付に1部屋、企業による出展のための展示コーナーに1部屋、保育室に1部屋、その他（控室、会議室、物置等）に小さなゼミ室程度の8部屋をそれぞれ使用しました。統計関連学会連合とは応用統計学会・日本計算機統計学会・日本計量生物学会・日本行動計量学会・日本統計学会・日本分類学会の6学会を指し、それらの共同開催の学会を統計関連学会連合大会（連合大会と略）と呼びます。例年の連合大会のプログラム内容としては、チュートリアルセッション・市民講演会・一般大会（企画セッション・コンペティションセッション・一般セッションを含む）から構成されています。それぞれの詳細については後述しますが、過去の大会と参加人数だけを比較すると、チュートリアルセッションの参加者は377名（2006年の東北大学開催は232名、2005年の広島プリンスホテル開催は205名、2004年の富士大学開催は143名）、市民講演会の参加者は約60名（2006年の東北大学では約200名）、一般大会の参加者は869名（2006年の東北大学では836名、2005年の広島プリンスホテルでは715名、2004年の富士大学では650名、2003年の名城大学では739名、2002年の明星大学では645名）、懇親会参加者は180名（2006年の東北大学では137名、2005年の広島プリンスホテルでは137名、2004年の富士大学では145名）と、市民講演会を除いて過去最高の参加人数を記録しました。市民講演会の参加者数が減ったのは、今年度の場合、チュートリアルセッションと時間帯が重なったことが主な原因であると考えられます（例年は、チュートリアルセッションと市民講演会とが重ならないように時間割が組まれていました）。しかし、全体的には非常に盛況であったように思います。

チュートリアルセッションでは、9月6日に、対象は主に大学院生とし、最近の統計学のトピックを講師の先生方に平易に解説して頂きました。今年度は、3つのテーマが用意されました。チュートリアルセッション参加者は「テーマ1」または「テーマ2とテーマ3」のどちらかを選択することになりました。テーマ1（13:00～18:10）は「ベイズ統計とベイジアンネットワーク」、テーマ2（13:00～15:30）は「大規模データ解析の現状と問題点」、テーマ3（16:00～18:30）は「生存時間解析における競合危険モデル入門」で、いずれも非常に興味深いテーマでした。

さらに、統計関連学会の社会貢献活動の一環として、市民講演会が9月6日17:00～19:00に、本館102号教室で、「統計データから見たEUと日本経済・関西経済について」というテーマで開催されました。対象は一般市民・大学生・大学院生で、参加費は無料としました。講師は日本経済研究センターの飯塚信夫氏と神戸大学大学院経済学研究科の久保広正教授のお二人にお願いし、出来るだけ多くの統計データを示しながら、EUと日本経済（関

西経済を含む)との関係を解説して頂きました。お二方の講演要旨は以下の通りでした。

- 飯塚先生の講演要旨：2度の踊り場局面を乗り越え、日本経済は戦後最長の景気拡大を続けています。こうした長期間の景気回復によって、日本経済はどのように変貌を遂げたのか。様々な統計データを用いながら、検証をしてみました。
- 久保先生の講演要旨：こうした拡大EUと日本経済は、密接な経済関係を築きつつあります。特に投資交流は目覚ましいものがあります。日本に流入する対内直接投資の大半はEU企業によるものですし、対外直接投資に占めるEUのシェアは常に上位に位置しています。果たして、何故にEU企業にとって日本市場は魅力的なのでしょうか。逆に、何故に日本企業にとって、EUは魅力的なのでしょうか。統計データを用いて、検証してみました。

一般大会(9月7日~9日)では、企画セッション・コンペティションセッション・一般セッションが行われました。各学会の会員からの公募により、13のテーマでセッションが企画されました(このセッションを企画セッションと呼びます)。また、過去4年に引き続き、5回目のコンペティションセッションを行いました。参加資格は2007年4月1日時点で満30歳未満の若手研究者(大学院生、教員を問わない)としました。コンペティションセッションとは若手研究者が研究発表の仕方を競い合うというもので、最優秀報告賞・優秀報告賞という賞を準備し、最後の閉会式の時に表彰しました。若手研究者にとっては、非常に励みになるセッションです。企画セッションとコンペティションセッションを除いたセッションを一般セッションと呼んでいます。そこでは、各研究者が自分の研究テーマに沿って、他の研究者に自分の研究内容を披露するというものです。企画セッション・チュートリアルセッションを含めて、全部で290の研究報告が行われました。数多くの研究者が自分の研究を報告したり、他人の報告を聞いたりして、非常に活発な質疑応答が各会場でなされました。研究報告をされた方も聞かれた方もともに、今後の研究に大変有益な情報が得られたのではなかったかと思います。研究報告の様子を撮った写真を掲載します。雰囲気だけでも伝わるのではないかと思います。



最後になりましたが、今年度の連合大会は(社)凌霜会と(財)六甲台後援会から助成金を頂きました。連合大会の運営において、大変助かりました。ここに感謝致します。今回のような本学で開催される大会に対して助成するという制度は、他大学にはあまり見られないようで、多くの他大学の先生方から非常に羨ましがられました。本学のみならず日本の大学における研究活動の一助として、今後もこのような助成金の制度を続けて頂けるように切に願っています。